消息に代えて

桑高房治

早いもので、藤枝東高等学校（当時は藤枝高等学校）を辞めてから、すでに十五年になろうとしている。教え子たちも、もう、みんな三十代の働きざりという年齢である。街角でふいに声をかけられたり、買い物に立寄った店の主人が、思いがけず教え子であったり、まことに懐しいかぎりである。

私が任職した頃は、志太中学校が、志太高等学校となり、更に女学校と一緒になって藤枝高等学校となり、また再び分れるという、まことに目まぐるしく落ちつかぬ時代であった。終戦後の物の乏しさは、お互いの心の上にも影響して、何か安定を欠いていたように思われる。当時をふりかえり、教師としてじゅうぶんにその職責をはたしう得なかったことを、いまさらながら悔いる次第である。

教育の仕事に携って以来、すでに三十八年を経過しようとしている。小学校、旧制中学校、高等学校、付属中学校、教育研究所、地方教育委員会、教育事務所、中学校長など、実にさまざまな勤務を経て、現在、藤枝小学校長をつとめている。教育関係で経験しなかったのは、幼稚園の先生と、大学の先生ぐらいのものであろうか。そんな、さまざまな道を歩きながら、いったい自分は何を心得たのであろうか、顧みて一抹の寂しさにつつまれることである。日は、すでに落日に近い。私は確かな残

年を、ただ誠実に教育のために尽したいと念願している。

藤枝東高等学校同窓生は、今日六千名を数えるということで、まことに喜びに堪えない。かって、千南原に寄気軒昂、青雲の志に燃えつつ学んだ諸氏を思うとき、感慨無量なものがある。往昔の志太中魂、旺盛なる士気は、いまも、なお、六千名の血潮に脈うっているのである。

同窓会の発展を切に祈りするものである。

（藤枝小学校長）

支部だより

東京支部だより

支部長　松山光夫

母校創立以来四十二年を閲し、益々拡充発展隆盛の一途を辿りつつあることは、同窓として喜びに堪えません。同時に卒業生の年令層も漸く厚くなって、社会のあらゆる方面に活躍されていることは力強い限りであります。東京在住の同窓も五、六百名に及ぶと思われますが、現在のところ支部の運営がまだ軌道に乗らず、地域・職域も極めて広範に亘るため全部の同窓を把握することができないのは残念です。

東京支部が結成されたのは、規約上昭和三十六年ですが、その数年前から有志の奔走によって藤高会として在京者の同窓会が発足していました。この間総会は前後四回開催され、毎回五、六十名集まっていますが、来る十一月二十六日第五回総会を開催のことに先般決定し、目下準備中です。回を追に今回の総会においては、特識の高揚と相互連絡体制の強化を図ることとしていますので、次第に充実した支部として、本部の活動に共鳴し合せた支部活動ができるようになるものと期待しています。

（第1回　電々公社）

清水支部便り

平松金一

金色に輝く蜜柑林のドライヴウエイを過ぎて日本平の頂上に聳く七合目辺りから右を向く雄かして富士山がクッキリと浮んでいる伊豆の山々が呼べば答えるかの様に近い「秋だなあ!」空気が澄んで居るなあ」深呼吸数回。

駿河湾は年後の目を受けて静かである。天人が一寸降りて見たくもなる景色である、こんな浮世離れの感慨にひたっている時、急にニブイ汽笛に現世につれ戻される瞬を眼下に転ずると外国籍船路の汽船が数隻碇泊しているのが見えるカナダのクリスマスに間に合せんものと目下生みかんの積込中でもあろうか。一隻は出航である「ああ、あの船の汽笛だったのか?」東亜燃料の沖にはタンカーが碇泊しその数万噸の巨体から原油を陸地の大きなタンクに送り込んで居るのだろう、製油プラント一〇〇来もあろうかと思われ、煙突の上からは時折り無気味な赤い焔がメラッメラッと見える。

明治・大正の大立者西園寺公望の別邸坐漁荘のあたりか、或は姉崎観風が樽生の死を偲んだ「清見潮頭波静かにして今雪雨シメヤカに降れ、友の慕辺に波静かなれ」の名文で有名な清見寺辺りか、磯辺には今や大防波堤が三保の突端に向って建設の真最中である。三保の松原に包まれた半島によって強い西の季節風を防ぐ此の天然の港は興津の防波堤によって東方の波を防ぐ様になった清水港は本当に天下一品だ。人口二十二万県内第三位の都市清水は港の町である、貿易額も去る十月すでに一〇〇億のレコードを造ったとか将来山梨、長野、新潟を結ぶハイウエイが完成すれば等々、清水の将来は明るい。

雑感

阪忍

「志太中」を卒業したのが、早くも三十年近く前のことであって見れば、記憶もさして定かではないが、それでもこの雑文をものする途中、ペンを休めて想い起して見ると、一コマ、一コマ切れぎれの記憶が蘇えってくる。軍事教練の「教練」というものがあり、「陸」の成績をとる為に全校一丸となって日没過ぎまでオイチニ、オイチニの訓練を連日繰り返した事「陸る」という覚醒的教育手段が屢々とられた事。「組分け試験」というものがあって、その成績により、A、B二組に分けて入学試験準備に専念した事。等々断片的に脳中に去来するのである。

「藤枝東高」と名前が変ったのは、単なる衣替え以上に、教育思想、方法において変貌を遂げているであろうから、而も私自身「藤枝東高」なるものに対し、曾目知識や経験を持たないので、「志太中」と「藤枝東高」を何等かの意味で比較して論ずるのは遺憾しなければなるまい。

唯、ここで「志太中」時代を振り返った場合、前述の軍事教練強制の為の訓練にしても、統一のとれた集団意識の昂揚に対する自らの行為を通じての練成手段の一つであったと考えれば、それなりに何時の時代にも通用する意味を持っている。陸るという事も、敢てスパルタ等という迄もなく、現世的意義を否定し得ない。入学試験勉強についても、頭と体力のギリギリの可能性限度を自らの意志で開拓し又確認する為の非常によい機会であって、あの世代の若者にとって是非共あって欲しいものである。

しかし、悪近の世の中では、例えばマスコミ等がこのような教育手段に対し深甚なる程の関心を示すように見受けられる。自由にして責任のある教育が叫ばれながら、諸々の外界の力を受けて却って不自由にして無責任な教育に堕している面はないだろうか。「同窓会」が「藤枝東高」の個性あるこれた校風を世間に認められる時、名実共に我等が母校として、会員の母校への郷愁も高まろう、協力も深まるものと思う、それが又会員の名誉でもあると考えている。

（第15回　静岡県議会議員）

思い出

尾崎精英

「若き歩の如し」という言葉があるが、現在の藤枝東高校、当時の志太中学の創立当初の「思い出」を書いてみようとペンを取ってみるとまさにその通りである。

私が学校出たての教員としてサッソーとして赴任したのが、昭和二年三月末のことで、数えてみると三十八年前のことであった。

当時県下には中学校（現在の高校）が数校あって、それに加えて教育発展の一かんとして数校が新設されたが、その中の一校として志太中学校は誕生したのであった。当時はいわゆる「学区」と称するようなものもないので、全くの自由競争の中に、門戸を張ってゆかねばならないので、新設中学校はどこでもきびしい試練のもとにおかれたものであった。「新興の意気」を相言葉として職員生徒が打って一丸となってぶっ進する、獅子奮迅（シシフンジン）のさまは今思い出すだに胸中爽快（サッソー）とのたぎる思いである。

校舎は校庭に芝を植えることが何かの折に校庭でキャッチボールをして誤って窓ガラスを割ったいうかどで、校長室に呼ばれ、さんざん油をしぼられたあげく、一時間も立たされたということが伝わるあるあるである。その先生方も今では時めく某の要職にあり、或は某大学教授等々である。さぞ思い出深いことであろうと想像申上げる次第である。

当時は校庭に芝を植えることが一種の流行とも云うべきで、美観すなわち、環境の整理のためにも又当時全国を風靡（フービ）した勤労奉仕教育の一かんのためにも我校でも、どこかから苗を ようとペンを取ると思い出が湧然（ユーゼン）として尽きないが、ます創立当初の厳功労者として三人の思い出を覆いてみようと思う。

一人は勿論初代校長鎧織先生である。先生のことはあまりに有名であるので改めて書くこともないが、厳しい一面に涙もろい情に厚い、いわゆる人情家であったと思う。きびしい面では、当時若手の先生二、三人が昼食休みに校庭でキャッチボールをして誤って窓ガラスを割ったいうかどで、校長室に呼ばれ、さんざん油をしぼられたあげく、一時間も立たされたということが伝わるあるである。その先生方も今では時めく某の要職にあり、或は某大学教授等々である。さぞ思い出深いことであろうと想像申上げる次第である。

折よく老夫人も居られ、私の訪問を喜び、なつかしがって下さったし、御子息の毅さんにもおあいして、昔語りができたことは何よりも嬉しいことであった。

先生は常に物事を大局から考え、事に当っては、情熱を傾けられたことは敬服に堪えないことで、今日は「サッカーの藤枝東」といわれるまでに発展したのは、偏に先生の御力の賜物であると思う。

先生は歌人若山牧水とは早大時代からの親友で、共に酒をよくなく愛し、趣味も深く、殊に旅行を愛し、先生のお宅でタ食をいただいた後など、徹くんを浮かべた頬（ホオ）に微笑をたたえながら謡される旅行の謡、風景の話などには先生自身もよわれ私共もすっかり酔わされたものです。

人に対する敬仰の念も四十年も経過すると大抵、変るものであるが、智井先生に対する念は、思い出すごとに増してくるのを感ぜる。こうした感をいだいている者は私一人ではないようである。牧水と同じく、先生がもっとも愛して居られた沼津の地で今の沼津東高校の教頭として他界されたのであったということは真相のようで、ご本人のご存知なかった事であろう。

鎧織先生についで功労者としてあげなければならぬ人は、創立当時の教頭、智井禎一先生である。先生は新潟県の御出身で、早大英文科御卒業と記憶している。私にとっては郷土の先輩でもあり、早大の先輩でもあって特別のめんどう見ていただいた。私の四十年近くの教員生活の中で最大の恩恵と感化を受けた方であり、今思出しても、なつかしさと、襟を正すような敬仰の念を禁じ得ない立派な方であった。

温厚、篤実という言葉がそのまま先生のために用意されたような方で、真の意味の教育者であったと思う。

先生は歌人若山牧水とは早大時代からの親友で、共に酒をよくなく愛し、趣味も深く、殊に旅行を愛し、先生のお宅でタ食をいただいた後など、徹くん浮かべた頬（ホオ）に微笑をたたえながら謡される旅行の謡、風景の話などには先生自身もよわれ私共もすっかり酔わされたものです。

人に対する敬仰の念も四十年も経過すると大抵、変るものであるが、智井先生に対する念は、思い出すごとに増してくるのを感ぜる。こうした感をいだいている者は私一人ではないようである。牧水と同じく、先生がもっとも愛して居られた沼津の地で今の沼津東高校の教頭として他界されたのであった。遺族の方の住所を知りたいと思うので、ご存知の方があったら知らせていただきたい。

次にもう一人創立当初の厳高功労者をあげるならば、杉山老便了（用務員）をあげねばならない。杉山じいさんが二人居って二人とも誠実な、かげ日なたのない好人物であったが、私のあげたいのは最初の時の方で、名前を四十年の歳月の中に忘れてどうしても思い出せない。この老人は当時の新設中学の先生方は皆若く、老人にとっては子か孫のようであったと思うが、若い世間知らずの私共のめんどうをよくみてくれて学校のためにもかげ日なたなく働いてくれたものであった。杉山老人は若い時分は相当の分限者であったと聞いている。甘いも辛いもよくかみわけた人で、恐らく当時を知っている古い卒業生諸君や、当時の先生方も四十年の昔を思い起して、ひとしお追慕と哀惜の念に堪えないものがあろう。折があったら杉山老便了を始め当時親しくしていただき、物授された方々の

母校への郷愁

鈴木一夫

「去る者は日に疎し」卒業して既に二十有余年を経て兎角母校とも疎遠になって行くのは、人情の常、自然の理とは云えど淋しい限りに思うが、「鳴呼岳南に精気あり」と謳歌する通りに幾年を経てもなお、一時の先生方も四十年の昔を思い起して、ひとしお追慕と哀惜の念に堪えないものがあろう。折があったら杉山老便了を始め当時親しくしていただき、物授された方々の

校への郷愁を憶えるのも、身は遠く離れても心は母校に通じている現れであると自ら思めてもみる。この母校への郷愁が偶々社会人としての道程に於て、非常に苦境に追い込まれる際、又逆に極めて順調な歩みを続けている折に、よって行くのは、人情の常、自然の理とは云えど淋しい限りに思うが、母校のよりよい発展を願う気持に於ては離れにも負けないつもりでいる。

我等が同窓生も既に六十余名になったと云う。この数の累積は又

母校への郷愁

鈴木一夫

志太中の……」此の母校の応援歌をクラス会の席上等に、或はふと口ずさむ時、たまらなく母校への郷愁を憶えるのである。

二、役員について

昭和三十八年八月、名称を改めると同時に、名称の欄でも記しました通り、若い人々に一人でも多く参加していただく為に卒業同窓会員の連絡について今迄大変苦労をしておりましたが、昭和三十十回ごとに副会長をお願いし、又八年度からは、会員一人につき終身会費と云う名目にて金参百円也を徴収し、その金額を基本金としてその利息を通信費にあてておりますが、この方法ですと年、会員一人に業書五枚程度出す事が出来ますので大変便利になりました。

四、事業について

二年に一度の総会を開催し、会員相互の親睦をはかっておりますその都度、恩い出の際、諸先生、会長等をお招きして、昔を偲んでおります。

五、本年度の事業計画について

十一月五日役員会を開催し、十二月末日までに各回ごとに会員の住所、氏名を確認し、昭和四十一年二、三月頃総会を開催する事を決定しております。

（第12回　正覚寺住職）

島田支部の活動状況について

島田支部　石上舜康

必要に応じて役員会（会長・副会長・幹事）を開催して会の運営に当っております。

会員の連絡について今迄大変苦労をしておりましたが、昭和三十八年度の事業計画の一つとして、第一回同窓会報を発行するにあたり島田支部の活動状況について簡単に記してみたいと存じます。

一、名称について

島田支部は田中英一氏（一回）会長のもとに、以前西部志太中会と称して、戦後益々発展して参りましたが、若い世代の人々を吸収する目的を以て、去る昭和三十八年八月藤枝東高等学校同窓会島田支部と名称を改めました。

今回模田新会長を迎え、同窓会も発展的新しい事業計画のもと邁進しております事は誠に嬉びにたえません。

その事業計画の一つとして、第一回同窓会報を発行するにあたり、島田支部の活動状況について簡単に記してみたいと存じます。

一、名称について

会長のもとに、以前西部志太中会と称して、戦後益々発展して参りましたが、若い世代の人々を吸収する目的を以て、去る昭和三十八年八月藤枝東高等学校同窓会島田支部と名称を改めました。

（第3回　鈴与建設KK）